

## 歌の史層

——『梁塵秘抄』成立への道

馬場光子

## はじめに

一つの岡と見えたものが、じつは幾時代を隔てては興亡を繰り返した古代都市国家の積み重なりであったことを、すでに私たちはトロイア発掘の話で知り、胸おどらせた経験を持っていきます。またイギリスの麦畑の表面に浮かび上がる円や四角縁がらの重なる模様、クロップマークは、遠く栄えた、しかも両者は遠く時代を隔てての城の遺構の形の表れであるといえます。すこし大きな話となりすぎましたが、これから考えてみようとするところは、この発掘調査といささか似ていなくもないという気がします。

## 一 今様

平安時代末期、都に大流行した歌、すなわち流行歌がありました。宗教儀礼にも国家儀礼にも関係なく個人の好みのみによって生命をつなぐ歌とは、平安京という都市の出現によってはじめて生まれることが可能となったジャンルだと思われれます。ことを「今様いまよう」といいます。「当世風・

今風」の意で、この名が初出するのは、『紫式部日記』や『枕草子』で、笛などにはたどたどしい若い公達がこれを歌ったとも、都の「をかし」を求める清少納言には、「くせづいた」曲調と聞こえたようです。この頃はまだ「今様歌」と読んでいたのですが、やがて一五〇年ほどを経て、今様と言えは今様歌を指す、固有名詞となるところに、平安朝末期の都に大流行した「今様」の姿をみることにあります。

たとえば、こんな歌々です。

仏は常にいませども

現うつならぬぞあはれなる

人の音せぬ暁に

ほのかに夢に見えたまふ（『梁塵秘抄』二 一 仏歌）

時は暁。夜の白む曙よりも、もつと夜に近い。神も鬼も幽霊も異界に帰る時刻、夜と朝との間はざま、人間世界と異界との間に仏が姿を見せるのだという。七日七夜の修行の果ての夢中示現の歌。一首の見仏はすべて臚おぼろ。時は暁、夜と朝とのあわい。「現ならぬ」「人の音せぬ」と、現実の人間が生活する言葉は否定形によってのみ表されて、「ほのか」「夢」というはかない言葉がつみ重ねられる。教義としての仏の常住不滅、夢中示現は硬質な論理性を後退させて、たおやかな情感が前面に押し出されてくる。今はじめて仏教に触れた人びとの今様の心として、鮮烈な祈りの心が情趣あふれる大和ことばによってつむぎ出される歌。これは都の叡山あるいは院政庁をとりまく仏教儀礼の場を背景として生

まれ出でた歌でしようか。

また次は東国から旅してきた歌でしようか。

君が愛せし綾蘭笠

落ちにけり落ちにけり 賀茂川に川中に

それを求むと尋ぬとせしほどに

明けにけり明けにけり さらさらさやけの秋の夜は

綾蘭笠は蘭を綾に編み中央に突出部のある左右が捲れ上がった笠。都の人々の興味の的、新興の武者の狩りの折などの被り物、瀟洒な美々しい笠。その笠が上空からヒラリヒラリと賀茂川の川中へと翻り落ちてゆく。川中にそれを探すうちに秋の夜は明けわたったのだという。ア音の明るく爽やかな響き、賀茂川の川音と秋の夜明けのサ音の繰り返しの中に、美しい笠を探すという詩情が流れている。

けれども歌の意は必ずしも明らかではない。君とは誰か、どうして笠は落ちるのか、なぜ誰が一晩中それを探すのか。実はこの歌の底には、古代的な恋の呪性がある。賀茂神社の丹塗矢伝承のように、乙女が川上から流れてきた矢を拾い床の辺に置くと矢は夜中男となり、乙女と契ったという一夜孕みの神婚譚。この場合、矢は男性の象徴であり神であつたが、<sup>へ</sup>笠もまた神の象徴、憑代の意を持っていた。

「落ちる」とは、「流れる」と同様に人間の意志を超えたしわざ、神意と捉える表現上の約束がある。落ちた笠を拾って床の辺に置けば、笠に見立てられた男が夜殿に現れるはずなのである。この類似歌謡は鍋島家本「駿河舞東遊び」に見出せるのみならず、江戸時代の伊豆三島明神の歌

としても残っていたという。一首の底には遠い村落の習俗に息づく乙女の恋の想いと、神歌構成の中に収められれば朝別れゆく神への惜別の心が流れている。この東国から都へ流れてきたのであるう歌は、都の中で、呪生は忘れさられ、賀茂川に詩情豊かな新しい抒情を歌い上げることになつた、と思われるのです。

## 二 梁塵秘抄

これらの今様を『梁塵秘抄』としてまとめたのが治天の君たる後白河院でした。書名は、中国の故事にのっとり、梁の上の塵をも動かす美しい歌声の響きを秘やかに書き写すの意。美濃国青墓を出自とする歌女、傀儡乙前から伝授された今様の声技を、継ぐ弟子がないので書き残すとした、今様を愛し執した後白河院の入魂の書、もしすべて残っていたら五〇〇〇首ほどの、『万葉集』にも匹敵する大歌謡群の姿を見ることができたはずです。その意味では、後白河院なくしては、あるいは院に今様の正統を教えた傀儡女乙前なくしては、この書は成立しなかつたといえましよう。

しかしもう一つ、この世にも稀れな流行歌謡の書が成立するのは、乙前と後白河院との出会いの一事に依るとばかりは考えられません。幾世代にわたって、美濃国青墓から東山道を今様を担って都へと旅した傀儡女たちの群行が、そのまま『梁塵秘抄』成立への史を形成していったのだ、と考えられるのです。

この幻の幾重にも重なるであろう青墓から都への歌が旅した道を発掘してみよう、とするのが今回の話となります。

### 三 今様起源譚と青墓

そもそも今様はどのように始まったのか、とルーツを尋ねる今様始源譚は、およそ七つほど残っています。『梁塵秘抄口伝集』一、『海道記』、『吉野吉水院楽書』に3種、『郢曲相承次第』、『尊経閣文庫蔵』『今様之濫觴』がそれです。これらの内容は三段階・四種類に分けられるでしょう。すなわち、

- ① 土師連八嶋はじのむらじやしまが歌い始めた歌に火星が付け歌したのを聖徳太子が見破った話。
- ② 藤原山陰中納言やまかげがその歌を再興し、それが今様と名付けられた話。
- ③ 美濃国青墓の宿の長者になった今様堪能の天曆（村上天皇）皇女の今様が都の今様の祖流となった話。
- ④ 美濃国青墓の宿の今様は、足柄明神が授けた歌を元とする話。その秘曲は傀儡女の女子実子相続によって伝えられた

以上の四種です。

これらの話は内容から見てどれもが独立して存在していたもので、それぞれがある時期、どこかの家（おそらく宇多源氏の音曲の家）の者の手によって集成され一つにまとめられたと考えられるのです。木で竹を継いだような繋がりで、とても始めから一連のものとは考えられません。思うに、

都の今様のルーツの一つは青墓の宿で、この地から四三、さきくさ、目井といった傀儡女が都の貴顕の邸に今様を持ち込んできた歴史的事実は動かしがたく存在していて、その青墓に起源伝承を付会したのが、今様起源譚と呼ばれるものでなかったかと思われるのです。このように、木で竹を継ぎながら、すべての伝承は青墓の宿を目指し、そして始発の地とも位置づけたのでした。

### 四 美濃国青墓——幾内と東国の境界——

それではなぜ、それが美濃国青墓の宿なのか、その謎は依然として解けません。また、なぜこの地だけに今様の秘曲が伝承されてきたのか、これも平安朝末期のその事実からだけでは解けません。

解の一つは地形にあるのではないでしょうか。この青墓宿は東国と幾内との境、伊吹山系と鈴鹿三系の間の不破の関からおおよそ十キロメートルの山裾に位置し、東山道がよいよ東国への山中に入るといふ地です。不破の関は言うまでもなく律令三関の一つで、幾内から東へ向かう東山道が美濃国に入る出入口を抑える位置にあり、都の非常事態に固関が行われました。そして延暦八年（七八九）に三関が停廃されてのちも、形骸化、儀礼化されながら江戸時代後期までそれはつづいたといえます。平将門が乱をおこした折、その調伏のため不破の関南五キロメートルほどの垂井町中山南神宮寺で寺中に護摩の焼香の煙が遍満した（『扶桑略記』天慶三年へ九四〇）一月廿四日条）という

のも東国への境界の意識の表れといえるでしょう。

しかしまたこの地は、東国にも北陸へも、そして伊勢地方にも通じる地でした。たとえば『平治物語』中「義朝興波賀に落ち著く事」（大系本・金刀比羅宮所蔵本）によれば、敗軍の將義朝は次のような言葉を息子たちに言っています。

義平は北国へくだり、越前国よりはじめて北国の勢そろへてのほるべし。朝長は信濃へくだり甲斐・信濃の源氏どもを催して上るべし。義朝は東国にくんだり、兵相具してのぼらんずるぞ。三手が一所になるならば、平家を滅ぼし……

つまりこの地は、この地から北陸道、東山道、東海道へと分岐する地点であり、またそれらの地から都を目指すときの結節点としてあったと読めるのではないでしょうか。兵も物品も地方地方から一旦この地この宿に集められ、あらためて不破の関を越えて都に運ばれた。歌もまた例外ではなかったのです。

## 五 青墓——古代口承職能民——

歌々が、特に東国の歌々が、行く手を山に阻まれ一旦はこの宿に集められ、留められた。それではなぜここに歌を伝承する傀儡女の一族が生活していたのか。これは平安朝末期、大炊氏に統轄され、また源氏との結びつきを強くしたところからは答えは見出せない。はるかに遠くこの地を特色づけていた口承性について思いを致すことにな

るのです。

この地は地名「青墓」から察せられるように大垣市だけで三〇〇基の古墳をもち、大宝二年（七〇二）戸籍によれば、この地一帯を含むと比定されている「御野国味蜂間郡春部里」に、「伍保 中政戸 土師部在戸口十五」と、土師一族がいたことが確認されます。古代、土師氏こそが古墳造営のみならず、喪葬儀礼をも掌った一族なのでした。また『延喜式』七神祇七踐祚大嘗祭に、「語部 美濃八人」と、他国に比べて多く記されているのですが、これも先の戸籍に一人見出せるのです。このような口承の一族がこの地にあつたのです。

また、美濃国は天武紀四年二月条にあるように、朝廷に「歌男、歌女」をさし出した国であり、またその伝習をも（天武紀 十四年九月）命ぜられるように、それを中央に献じた一族がそのまま国においても忠実に伝習してきた、ということではないか、そしてその地が青墓の地一帯ではなかったかと思うのです。

見えない道まで掘ってききましたが、その道の幾層もが重なり、乙前の名の出る道の地層、都への歌の道を支えているのだと思われるのです。

（編集部注）この講演要旨は、杉野女子大学短期大学教授の馬場光子先生にご講演いただいたものを、先生のお手を煩わせた。なお講演会は駒澤短期大学国文科主催で平成九年十月十四日（火）午後一時からもたれた。